

# 「五月節句の由来」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

新暦がすっかり定着した今、五月節句は新暦の五月五日に行われている。もともと現在、五月五日は子供の日となり、必ずしも男の子だけの無事成長を祝う日ではなくなった。それでも男の子が誕生すると鯉幟を上げ、武者人形を飾り、五月五日が過ぎると仕舞い込む。まだまだ五月五日は、男の節句との意識は強い。

五月節句の風習、宇都宮辺りでは、男の子が生まれると母親の実家から武者人形や鯉



軒先に飾った  
蓬と菖蒲

幟が贈られ、男の子が生まれた家では、早々と鯉幟を上げ、武者人形を飾る。また、男の子の誕生にかかわらず菖蒲や蓬を軒先に飾り、菖蒲湯に入り、菖蒲酒を飲み、柏餅を作り食べる等といったことが行われた。

ところで、五月節句の風習には、女性にまつわる風習が多い。例えば菖蒲湯に入る風習では、「女は菖蒲湯に入るものだ」とか「女は菖蒲湯に入り、菖蒲で鉢巻きをすると脳病みしない」。また、菖蒲酒を飲む風習では「女は蛇の子を宿さないように菖蒲酒を飲むものだ」といった言い伝えである。ちなみに栃木県には、五月節句に女性が菖蒲酒を飲むことについて次のような話が伝えられている。

「昔、母親と娘一人の家族がいた。毎夜娘のところに怪しい男が通つて来た。不思議に思った母親は娘に、男が家を出て行く時に、袴の裾に糸を通して針を突き刺すように

いった。母親が糸を辿つて行くと石垣の間から、人間は利口だから蛇の子を宿したと知つたら菖蒲酒を飲み墮胎してしまふから気を付けてると、蛇の母が倅に言っている話声をした。母親は家に戻ると娘に菖蒲酒を飲ませた。すると娘は蛇の子を流産した。丁度その日は五月五日だった。以来、女は蛇の子を宿さないよう菖蒲酒を飲むのだという」

五月節句が女性と関係深いことについて、近松門左衛門の浄瑠璃『女殺油地獄』に「三界に家のない女ながら、五月五日のひと夜さを、女の家といふぞかし」との二節がある。女の家とは、五月五日の夜、男性を排除して女性が家に籠ることをいったもので、近松が生きていた頃、大坂や京都等ではこうした風習があったという。

五月節句に女性が家に籠るのは、この頃が田植えの頃であり、稲作の主役を務める女性が、田植えに先立って行われる田の神様の祭りにあたり、身の穢れを祓うたの忌籠りに由来したものである。

五月節句に女性が菖蒲湯に入り、菖蒲酒を飲む風習も、女の家と同じく女性が穢れを祓うためのものである。

つまり五月節句は、本来、田植えを前にした田の神様の祭りであった。鯉幟を立て、菖蒲や蓬を軒先に飾るのも、もとをただせば田の神様を招く目印であり、祭りの場を清めるために邪気を祓うためのものであったのである。

このように本来、女性による田の神の祭りであった五月節句に、男の子の無事成長を祈ることが加わったのは、江戸時代になってからである。武士の世の中となり、菖蒲が武勇を重んじる意味の尚武と同音であることによる。

六月半ばには柏の葉も大きくなる。真新しい柏の葉で作った本物の柏餅を食べるのもまた楽しい。旧来の五月節句の風習を多少味わいながら。



鯉幟